

「情報の世紀」のモノづくり考（9）

IT革命と教育上の諸問題

和田龍児

すべての道は教育につながる

われわれは着々と進む IT 革命を通じて、どのようなマネージメントを目指すべきなのであるか？ ここでいうマネージメントとは、会社の経営という狭い意味ではない。将来あるべき姿に向かって、現実をどのようにマネージしていくかということである。

長い会社勤めを終えて、大学で教鞭をとることになった筆者は、キャンパスの中で、これまで知らなかった衝撃的な現実につき合うことになった。それは学生が大きく変質しているということである。少なくとも、筆者の描いていた学生像とはまったく異なり、思いもかけない方向に変質してしまった学生たちが闊歩する現実である。彼らはやがてキャンパスを巣立ち、その多くが企業人としての人生を送ることになるだろう。その時、企業社会はどのように変わっていつてしまうのだろうか。最近の学生の行動・思考パターンを見ていると、誠に空恐ろしい将来を想像してしまう。

以下、筆者がキャンパスで感じたさまざまな不安を含め、このことについて、若干、触れておきたいと思う。

現在、筆者は、2年生を対象とした経営学の入門的な講義を受け持っている。この講義中の私語の多さは隔世の感がある。それどころか、朝から居眠りする連中、携帯電話のメールに熱中する者、ノートも筆記用具も持たずにヘッドホンを耳にさしたまま、ボケーとしている思考停止状態の輩やら、実に嘆かわしい状況にあるといわざるを得ない。

私学にとって確かに学生はお客様であるが、レストランに入った客が何も食べるつもりもなく、注文もしないまま席に居座っているようなものだ。何とか、お客様に対して、よいサービスを心がけようとしても、こうした客相手では、如何ともしようが無い現実がある。

こうした学生諸君の行動は、将来に対する閉塞感が充満していることによるのだろう。自分の将来に希望を持てと、いくら声高に叫んでも、空虚な響きが教室にこだまするだけで、それも学生諸君の私語の嵐の中に掻き消されてしまう。

教育問題は学校の中だけで話れない

以前から、大学生にも幼児化退行現象が進んでいることを憂える声を聞いていたが、実際に、その現実を目前にすると呆然とするものがある。金髪、茶髪、ピアスにギンギラギンの指輪、趣味の悪い腕輪、ブーツに底高靴といま流行の狐目型色メガネ。

こうした外見はともかくとしても、無思想・無哲学、群集心理による無責任な行動、自己確立の未熟な甘えの構造、他責による自己主張など、彼らの日常の行動パターンを観察していると、未成年の凶悪犯罪の多発もむべなるかなという感慨を抱かせるのに十分な材料を提示してくれる。

彼らは、教育とは何かとの深刻で重い課題を、突きつけているのである。もちろん、これは、単なる教育だけの問題ではない。日本という国の近未来に大きな影響を及ぼす大問題なのである。今日のキャンパスでの状況は多かれ少なかれ、広く

企業社会一般にも、さらには社会や政治にも影響する問題でもあるのだ。

これは、正に日本社会に巣くう歪んだ構図が凝縮されて、若者の魂や行動に投影されているのだと筆者は考えている。その背景には、1945年以降の大家族制度の崩壊や、戦後半世紀の日本の産業・社会構造の変化に対応しきれない政治体制、国民の倫理観・公共心の欠如、私利私欲の効率至上の企業運営などの問題にまで至る根深い日本のシステムの問題点が横たわっているのである。言葉を換えるなら、拝金思想と極端な経済効率主義をもたらした功罪は、若者の魂に深い影を落としているといってもよい。

だからこそ、教育の問題は、政府が音頭を取り、政治家や官僚、教育関係者が集まって政府の諮問を審議すれば、こと足りるとするような発想では対応できない。確かに高校生にボランティア活動を義務づけたり道徳や倫理教育を強化することも必要かもしれない。一方では現在の大学制度が市場経済になじむかどうかを含めた大学の独立法人化の議論も大切だろう。しかし、それ以上に筆者には本質的な問題解明と教育問題の垣根を超えた取り組みが必要ではないかと考えている。

学生たちの思いもよらぬ答案

前述したようなキャンパスの現実を目の当たりにして、諦めに近い感じを多くの大学教師は抱いていると思う。昨今の大学生の学力低下もまた驚きを越して呆然とするほどだ。

とはいえ、愚痴や泣き言だけ言っても何も始まらないので、筆者は授業の内容を精選して単純化し、OHP やパワーポイントなどのプレゼンテーションソフトを活用して、なるべくわかりやすく理解できるような教材を作って講義を行うことにした。

筆者の講義はまず、一人ひとりの出席を確認す

ることから始まる。そして講義。90分の授業だが、最後の15分は直前までの講義内容をミニ・テストの形式で出題することにした。これなら、学生諸君も少しは講義に耳を傾けるに違いないという思いからである。このミニ・テストはノートを見ても、何をみてもよいことにした。携帯電話を利用したカンニングが横行する時代だが、こうした古典的な試験方法は逆説的なカンニング防止対策として機能することも発見した。まずはめでたしである。

さて、経営学の講義では、最初の段階で必ず取り上げる定番のテーマはF. ティラーの科学的管理法だ。この講義の後に行ったミニ・テストの出題は「ティラーの科学的管理法について説明せよ。このような労務管理法は現在も通用するであろうか。考えを述べよ」というものにした。

引き続き、講義はフォード・システムの説明に続いて、人間関係論や行動科学の嚆矢とも位置付けられる有名な、「ホーソン工場の実験」の話に移り、労働者を一種のロボットとみなして機械的管理を行い始めた科学的管理法の問題点を説明し、このような労務管理法は現在では通用し難いものになっているという結論を導くというオーソドックスな流れで進めることにしていた。

ところが、初回の講義のミニ・テストの答案を見て、筆者は啞然としてしまった。講義中にあれほど説明したにもかかわらず、「ティラーの科学的管理法は素晴らしい。差別的賃金体系は、今でも立派に通用するものだ」とする礼賛の回答が大部分であったからである。ある学生の答案の中には、「僕はアルバイトでコンビニで働いております。深夜勤務は給与が高くなり働き甲斐があります。だから、科学的管理法は素晴らしいと思います」といった回答が記入されていた。

数年前の学生諸君とは意識も考え方も180度近く変わってしまった。かつての学生たちはどこに

いってしまったのだろうか。いやが応でも実感せざるを得ない大事件であった。筆者は、講義の進め方を再検討しなければいけないと考えざるを得なくなった。敵はウォークマンや携帯電話、そして私語の横行だけではなかったのである。

IT 革命は、テラー・システムを復活させる

しかし、ふと思ったことがある。古典的なテラーイズムを単純に礼賛する学生たちの捉えている現実とは、確かにそういうものかもしれないという問い返しである。会社生活はおろか、十分な社会経験も積んでいない若者にとって、彼らの見ている身近な現実とは、テラーイズムの通用する世界なのではないかということである。

彼らが社会の主演として活躍する 21 世紀に、100 年前の経営手法が復活するわけではないだろうが、現代版ティラー・システムは、外食チェーン、コンビニ、製造業の一部にもその萌芽が見受けられるようになった。

筆者が描く現代版ティラー・システムのイメージとは、次のようなものだ。一群のデータベースを管理するサーバーの下に、マニュアルに忠実なテンポラリー・ワーカー集団（フリーター）とサーバーとマニュアルを管理するコンピュータ・リテラシーに習熟した一握りの管理者により構成される企業形態である。

テンポラリー・ワーカーは、いつの時点で入社しても業務遂行には支障をきたす恐れはないし、業務上の秘密も漏洩する危険もない。完璧なマニュアルがそれを保証しているからである。「キミでなくてはならない」ということのない不特定で匿名的な人間を機能させるしくみの中で、ワーカーに求められる唯一の規定義務はマニュアル（＝聖書）の指示以外の行動は一切禁止ということだけである。業務システムの基盤となるデジタル・データの連続性を犯す事態が発生せぬか

ぎり、この企業は順調に機能するはずである。

このようなシステムのマネージメントは、どうあるべきなであろうか。一方、ワーカーとしての若者たちも、ますますゲーム感覚になる。しくじってゲーム・オーバーとなっても、無限回のリセット可能で、やり直しが効きやすいシステムでもあるため、彼らのゲーム感覚の人生はますます高じていく。

人生もまたゲームのように、仮想空間のネットワーク上で簡単に実現できるのではないかという錯覚は、若者ならずとも蔓延していく可能性もある。そうした錯覚から現実に目覚めたとき、人間はそのギャップをどのように理解し埋めていくのだろうか。

IT 革命の進展で、デュアル・モードの社会階層が構成され、マルチ・モード人間が多数出現するという予測がある。たとえば、生活費はフリーターで稼ぎ、ボランティア活動や自己陶酔の芸術活動で自己実現を目指す。こんな人生すら可能にするのが IT 革命であるというわけだ。IT 革命後の将来像を描くことは至難の業だが、キャンパスにたむろする学生諸君の日常行動を観察すると、そうしたポスト IT 革命後のトレンドの萌芽が始まっていると思えることがある。

これまで述べてきた通り、大学のキャンパスの中だけの狭い意味での教育問題ではなく、広く社会を覆い始めた現実と若者たちの行動には深い相関がある。教育問題をどうとらえるかという話にもどれば、こうした現実の広がりの中で語られなければならないのではないかと考えるしだいである。しかし、教育問題はそこまで踏み込んだ議論はしてはいない。

教育問題を考えることは、IT 革命を考えることでもある。現代版ティラー・システムは多くのことを考えさせてくれる。(2001/2/13)

